

ありた屋の奥座敷だ。

そこに、遊齋と間宮林太郎は、並んで座している。

ふたりの左側が障子戸になっていて、庭の明りが映って、白く光っていた。

その奥座敷には、ありた屋の主だった者たちが集まっている。

まず、ありた屋の主人、仁左衛門。

番頭の嘉兵衛。

女中頭の富。

進三郎の妻の咲。

そして、若い女——小田原からやってきた進三郎の妹の光。

いづれも、疲れた顔をしているが、その中でも憔悴しきっているのは、主の仁左衛門であった。

それも、無理はない。

ほぼ間をおかず、たて続けに、女房の妙と、息子の進三郎が亡くなっているからだ。

しかも、ただの死に方ではない。

妙は、桜見物の最中に、化物に髪の毛を掴まれ、木の上に引きずりあげられ、その身体を喰われてしまった。

残ったのは、落ちてきた首だけである。

その二日後に、進三郎が死んでいる。朝、咲が目を覚ましたら、布団の中で死んでいたというのである。それも、ただの死体ではない。全身が干からびて、木乃伊のようになった死体であった。

いったい何がおこっているのか。

間宮林太郎は、この件では最初から調べてはいたのだが、妙が首になった時点では、まだ半信半疑だった。何者かが、妙を殺しておいて、それが化物の仕業であると、店の者が皆で口裏を合わせているのではないか——そういう可能性もあったからである。

しかし、当日、現場にいた他の者たちの話を聞いてみると、どうやら、店の者たちが言うことは本当らしい。

そう考えている時に、進三郎が奇怪な死に方をした。

これは、自分たちの手におえる話ではないと考え、間宮林太郎は、遊齋のところへ顔を出したのである。

そもそも、いつもは自分から首を突っ込んでくることのない遊齋が、今回に限っては、早くからからんでいたのは、妙が首にされた時、御殿山の現場に土平がいたからであった。

これはいづれ、間宮林太郎から助っ人の依頼が来るであろうと読んで、あらかじめ土平にあたらせていたからである。

土平は、遊齋とは逆で、こういう事件に首を突っ込むのが楽しい。

悲惨で奇怪な事件であればあるほど、神妙そうなふりをしながら、その口元には笑みを浮かべてしまう性なのである。

だから、間宮林太郎がやってきた時には、すでに、遊齋は事件のあらましを理解していたのである。

ちなみに――

ありた屋の事情についても、すでに遊齋はおおまかには把握している。

ありた屋仁左衛門には、進三郎、光の他に、もうひとり、子があつた。

源治郎げんじろうといつて、二十八年前に、最初の女房であるおそのが産んだ子だ。おそのは、源治郎を

産んだその年の十一月に亡くなり、奇怪な死に方をした妙は、仁左衛門の二度目の女房である。

おそのが死んだ二年後に一緒になり、その二年後に進三郎が生まれたのである。

源治郎は、三年前、二十六歳で亡くなっている。

そういった諸々の事情を肚はらの中に入れて、今、遊齋と間宮林太郎は、ありた屋の者たちと向かいあっているのである。

間宮林太郎が、遊齋をともなつてありた屋を訪れた時、店の者たちは怪訝けげんそうな顔をしたが、「こちらは、人形にんぎょう町の遊齋先生と申して、色々と妖あやしの世界のことには通じておられるお方かたな、かような事件の時には、いつも御助力をお願いしておるのだ」

間宮林太郎が説明すると、怪訝けげんそうな表情は消えぬながら、仁左衛門をはじめとする店の者たちも、そこそこには納得したような顔つきになって、今、ふたりはこうしてこの場に座しているのである。

「だいたいのところは、すでに遊齋先生も御承知じゃ。しかし、あらためて、訊きねてみたいこともおありのようだな。すでにわたしに話したことであつても、遊齋先生から訊きねられたら、今一

度、話をしてもらいたい——」

間宮林太郎は、一同に向かつて言った。

皆の視線が、あらためて遊齋に集まった。

遊齋は、正座をして、腿ももの上に両手を静かに置いている。

杖つえは、家にあがる時に預けてあり、二胡にこは今、座した遊齋の左側に置かれている。

間宮林太郎は、遊齋の右側に座している。

皆の注意が遊齋に向けられているのも、理由がある。

白い髪、清国しんの人間が身につけるような服、江戸の街には他にいそうにない風体ふうていの遊齋のことが、皆、気になっていたのだ。

しかし、あからさまに視線を向けるわけにもいかず、これまでちらちら視線を送っていただけであったのが、遊齋に、話がふられたことで、皆が安心して遊齋に視線を向けてもよいことになったからだ。

「では、お訊ねします」

柔らかな声で、遊齋が言った。

「まず、櫛くしのことからうかがいましょうか」

「櫛？」

仁左衛門が不思議そうな顔をした。

「ええ」

「櫛が、何か——」

「亡くなられたお妙さんは、その日、赤い櫛を髪に挿^さしていらっしやったとか——」

「その通りですが……」

「その櫛、しばらく見あたらなかつたとうかがっておりますが」

「はい、よく御存じですね」

「いったい、いつ頃から、その櫛は見あたらなくなっていたのですか？」

問われて、仁左衛門は、

「はて——」

と、助けを求めるように、他の者に視線を向けた。

すると、

「ひと月近く前だったと思いますが……」

仁左衛門のかわりに、口を開いたのは、女中頭の富であった。

「見つかったのは？」

「あの日、お出かけになる日の二日ほど前だったと思います」

「大事にされていた櫛でしたんでしようね」

「ええ。家にいらっしやる時にもよくお使いになっていらっしやいましたし、お出かけになる時

にも、度^{たび}……」

「どうして失^なくなったんでしょう」

「さあ……」

「使^{つか}っていて、どこかに落としたとか？」

「よく、存じあげません」

「最初に失くなったことに気がついたのは、どなたですか」

「御本人のお女将かみさんです。何かの用事でお出かけになる時に、見つからないと——」

「それが、ひと月前——」

「ええ」

「いつもは、どこに置いてあったものなのですか——」

「お出かけの時に、髪を整えたり、紅を刷はいたりするお部屋がございまして、そこだったと思います。そこでは、よくわたしも、お世話をさせていただいております」

「部屋のどこですか——」

「鏡の横に、これくらいいの、櫛かんざしや簪かんざしを入れておく、小さな簞笥たんすがございまして、その引き出しの中に——」

「いつも入れていた？」

「はい」

「では、お出かけの時に、そこになかったということですね……」

「そうです」

「それで、見つかったのは、どこでしたか？」

「その簞笥の引き出しの中です」

「前に捜したのに見つからなかったのが、実はその中であつたと……」

「そうです」

「見つけたのは、お妙さん？」

「そうです、お女将さんが、見つかった、あつてよかつたつて——」

「不思議ですね。前に捜して、見つからなかったのでしょう……」

遊齋が言うと、

「よくあることでしょう」

そう言ったのは仁左衛門であつた。

「捜しても見つからない。しかし、実は何度も捜したはずのところに失せものがあつたというこ

とは——」

「そうですね」

遊齋は、うなずき、

「その櫛は、今、見ることが出来ますか」

富に向かつて言った。

(つづく)